

医学書テキストのたとえる表現 (2) —接尾辞「一状」の特徴

本多 由美子 (一橋大学・国立国語研究所) †
三枝 令子 (元一橋大学)

Illustrating Expressions in Medical Texts (2) : Characteristics of the suffix “jou”

Yumiko Honda (Hitotsubashi University / NINJAL)

Reiko Saegusa (Hitotsubashi University)

要旨

本研究では医学書テキストにおける「たとえる表現」の一端を明らかにする目的で接尾辞「状」に注目し、用法を分析した。調査には医学書5冊(約450万語)のデータを用いた。分析の結果、前接する語には「S、線」など形そのものを表すもの、「粥、海綿」など質的な様子も表す語、「嚢胞、結節」などの部位が変化した形を表す語が多く、後接する語には「血管、結腸」などの体の部位や「陰影、硬化」など病態を表す語が多かった。「状」の後には名詞が最も多いが、3割程度は「の」を介した名詞修飾や「に、と」などを介した動詞修飾用法であった。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍に付与されたNDC情報を用いて比べたところ、「状」は医学において多用される語であることが示唆された。また、同じ「たとえる表現」の接尾辞「様(ヨウ)」と比較した結果、「様」の前には疾患名のような状態全体を表す語が見られ、用法の違いが観察された。

1. はじめに

筆者らは、日本の医師国家試験を受験する外国人学習者への日本語支援を目的として、医学教材の開発を目指し、医学書テキストを対象とした言語学的分析を行っている。医学書テキストには、患者の症状や、検査結果などをもとに診断を行うための情報が記載され、そこには「どのような状態・様子であるか」を表す「たとえる表現」が見られる。たとえる表現は、「蕁状血管腫」や「網目状の紅斑」のように対象(血管腫、紅斑)を具体的に説明するのに用いられる。医学や医療の分野における先行研究では、用語の抽出や合成語の語構成に関する研究が多く行われているが、たとえる表現を分析した研究は「ような」と接尾辞「様(ヨウ)」のみであり、その他の表現については使用傾向が明らかではない。そこで、本研究では、医学書テキストのたとえる表現の1つである接尾辞「状」の分析を行う。

まず、「何」を「どう」たとえるのかという観点から、接尾辞「状」に前接する語(=どう)と後接する語(=何)に注目し分析を行う。次に、医学書テキストと一般的な書き言葉との比較をするために『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJと略す)から抽出した「状」のデータとの比較を行う。さらに、同じくたとえる表現である接尾辞「様」との比較をとおして、「状」と「様」それぞれの特徴を明らかにしたい。

† nihonda[at]hotmail.com

2. 先行研究

接尾辞「状」は、「名詞に付いて、...のような形である、...に似たようすである、などの意を表す。」(『デジタル大辞典』)と説明されている。野村(1978:116,120)では、「状」は「的」や「様」と同じく、「...ノヨウス」「...ラシサ」といった意味をそえる「相言型」に分類され、「相言型」全体の特徴として、「～状ノ～」という形で体言を修飾することが多く、「ガ」・「ヲ」などの格助詞をともなうことはほとんどないと述べられている。「状」については、「のり状」という語例が紹介されているが、詳しい言及はされていない。

医学や医療に関する用語では、接辞の頻度が高いことが指摘されている(三枝他 2020、内山他 2018)。しかし、個別の接辞を扱った研究は、病名における接辞「性」を分析した東条他(2020)など、わずかである。

医学書テキストを対象に、たとえる表現を分析したものには三枝・本多(2021)がある。三枝・本多(2021)では、たとえる表現の「ような」と接尾辞「様」の用法を比較し、「ような」よりも「様」を用いた表現のほうが叙述性が薄まり一語性が強くなることや、「様」の前に疾患名が置かれる用法は医学特有の表現であることが指摘されている。

3. データ・調査手順

本稿では医学書テキストのデータに以下の5冊を用いた。①~④は長年版を重ね現場の医師によく利用されている書籍であり、⑤は医師国家試験の受験参考書として評価の高い書籍である。

- ① 『今日の治療指針 2018 年版』
- ② 『今日の診断指針 第7版』
- ③ 『新臨床内科学 第9版』
- ④ 『今日の小児治療指針 第16版』
- ⑤ 『イヤートート 2020 内科・外科編』

この5冊から本文テキストを抽出し、このうち句点で終わる行のみを対象に形態素解析を行った²。語数は4,510,648語(記号等・空白・改行を除く)である。以下の手順で分析対象の語を抽出したところ、1,921語となった。

- ① 形態素解析の結果から語彙素が「状」かつ品詞が「接尾辞-名詞的-一般」のデータを抽出する。
- ② 前接する1語(以下、「前接語」とする)が補助記号、空白、未知語のデータおよび後接する1語(以下、「後接語」とする)が未知語のデータを除外する。
- ③ 目視で「状」が「書状」を表す例および誤解析を除外する³。

¹ 野村(1978)では接辞性字音語基を「体言型」「用言型」「相言型」に3分類している。

² 形態素解析にはMeCabのver.0.996(辞書はUniDic-cwj-2.3.0)を使用した。

³ 「状」が書状を表す語は9語(紹介状8語、告訴状1語)であった。誤解析の例は、「胃腸炎症状」や「有症状」が「胃腸／炎症／状」「有症／状」と解析されるような、「症状」の誤解析で、296語であった。

4. 医学書テキストにおける「状」

4.1 前接語の特徴

「状」の前接語は、延べ語数 1,921 語、異なり語数 366 語であった。表 1 は、頻度 30 以上の語を高頻度順にまとめたものである。「例」の欄には、後接する 1 語あるいは 2 語を確認し、頻度の高い表現を挙げた。例えば、「S」は 85 例のうち 78 例が「S 状結腸」であった。

表 1 で最も頻度の高い語は「S」であるが、「状」全体に占める割合は 4.4% である。このことから、「状」には多様な語が前接していることがわかる。表 1 に挙げた語を見ると、「S」「顆粒」「線」のように、形そのものを表すものや、「索」「尾」「巢」など、形に特徴のあるもの、「粥」「海綿」のように、質的な特徴を想起させるものも見られる。また、「嚢胞」「結節」は部位が変化した形を表す語である。「嚢胞」は『医学大辞典』によると、内腔に液体や泥状物を含む袋のような形の構造物であり、外から見た形に加え内部の質的な様子も想起させる語である。

表 1 の「例」の欄では、語彙素の頻度に占める割合が 30% 以上のものを下線で示した。表 1 に示した前接語 12 語のうち、「S」「粥」「海綿」「索」「尾」の 5 語は、「S 状結腸」(78 例、91.8%)、「粥状硬化」(31 例、48.4%)、「粥状動脈硬化」(22 例、34.4%)、「海綿状血管腫」(25 例、50.0%)、「索状物」(15 例、31.2%)、「尾状核」(29 例、69.0%) という形式で用いられていた。このように、頻度の高い前接語の中には、さらに長い合成語を形成し、ある程度決まった形式で用いられるものがあることがわかる。

表 1 接尾辞「状」の前接語（頻度 30 以上、N=1,921）

順位	語彙素	頻度	割合	例
1	S	85	4.4%	<u>S 状結腸 78</u>
2	粥	64	3.3%	<u>粥状硬化 31</u> 、 <u>粥状動脈硬化 22</u>
3	嚢胞	55	2.9%	嚢胞状に～13
3	顆粒	55	2.9%	顆粒状の～10、顆粒状沈着 10
5	海綿	50	2.6%	<u>海綿状血管腫 25</u>
6	結節	48	2.5%	結節状の～12
6	索	48	2.5%	<u>索状物 15</u>
8	尾	42	2.2%	<u>尾状核 29</u>
9	乳頭	35	1.8%	乳頭状腫瘍 5
10	線	34	1.8%	線状の～7
11	泡沫	32	1.7%	泡沫状の～10
12	巢	30	1.6%	巢状分節（性～） 7

・下線：語彙素の頻度に占める割合が 30% 以上のもの

医学書テキストにおける「状」を用いた表現は、(1) の「顆粒状」のような視診のほか、(2) の「索状物」のように触診の際の情報を示す場合もある。

- (1) 主に糸球体係蹄に顆粒状かつ花卉を縁取るような形態でみられ、本症を診断する手がかりとなる（内科_腎疾患）

(2) 下腹部に連続する腫瘍や索状物を触知することもある。(診断_小外科疾患)

また、表 1 の語種を見ると、「S」を除くとほぼ漢語である。形態素解析の結果では「粥(カユ)」「尾(オ)」「巢(ス)」はいずれも和語に分類されているが、本調査で用いた医学テキストでは「粥状(ジャクジョウ)」「尾状(ビジョウ)」と読む。「巢」は頻度 30 のうち、「巢状(ソウジョウ)」が 28、「クモの巢(ス)状」が 2 であった。

表 1 には掲載されていないが、和語で頻度が高かった前接語は、「鎌(カマ)」24、「編目(書字形:網目)」21、「莓(イチゴ)」18 であった。外来語の前接語は高頻度順に、「リング」22、「ポリープ」18、「ゼリー」17、「ガラス」14、「ドーム」11、「バルーン」5、「スリット」5、「ドーナツ」5 であった。「リング」「ドーム」「スリット」「ドーナツ」のように形に特徴のあるものや、「ゼリー」「ガラス」のように質的な特徴を想起させるもの、「ポリープ」のように体内にできた病変を表す語が見られ、表 1 に見られる語と特徴が重なる。

4.2 後接語の特徴

表 2 は、状の後接語の品詞を見たものである。全体としては名詞接続が 54.3% と半数を超えている。2 位は助詞で、32% を占める。表 3 は、「状」の具体的な後接語を高頻度順にまとめたものである。延べ語数は 1,921 語、異なり語数は 207 語である。後接語で最も頻度が高いのは助詞の「の」であった。このことは、「状」の後には名詞が接続することが最も多いが、「の」を介した名詞接続も少なくないことを示している。「の」の次に多い後接語は同じく助詞の「に」で、「に」を介してさらに動詞に接続する(に拡張する 19 例、になる 16 例など)。表 3 の頻度 32 以上の高頻度の後接語 12 語の中で、助詞 4 語、名詞 6 語、さらに補助記号 2 つと、「状」の後接語は多様である。

表 2 「状」の後接語の品詞

順位	品詞	頻度	割合
1	名詞	1,042	54.3%
2	助詞	616	32.1%
3	補助記号	147	7.7%
4	接尾辞	53	2.8%
5	接続詞	31	1.6%
6	接頭辞	18	0.9%
7	助動詞	8	0.4%
8	記号	4	0.2%
9	形状詞	1	0.1%
9	空白	1	0.1%
合計		1,921	100.0%

表 3 接尾辞「状」の後接語

(頻度 32 以上、N=1,921)

順位	語彙素	頻度	割合
1	の	303	15.8%
2	に	198	10.3%
3	血管	83	4.3%
4	結腸	78	4.1%
5	,	61	3.2%
6	陰影	58	3.0%
7	硬化	35	1.8%
7	と	35	1.8%
9	を	34	1.8%
10	核	33	1.7%
10	突起	33	1.7%
12)	32	1.7%

表 3 の 5 位の補助記号の読点は以下の (3) に見るように並列用法である。また (4) に見

る 12 位の「」は、前に示された語の内容を「状」を用いて説明しているもので、独立用法と言える。表 2 の 5 位の接続詞は (5) のような「または」「あるいは」等、並列の接続詞が用いられている。

- (3) 表面は不均一で、乳頭状、結節状、ポリープ状など様々な形態の腫瘤形成がみられる。
(診断_産科・婦人科の症候)
- (4) 初期：発熱（階段状）（イヤート_感染症）
- (5) 混成石はコレステロールとビリルビンカルシウムの成分が結石の中に混在しエコーでは半月状または三日月状で強い音響陰影を伴う。(診断_腹部・消化器系の症候)

以上の「状」の後接語の観察から、医学書テキストにおける「状」は名詞複合語の一部を構成する場合もあるが、動詞を修飾する用法、並列的な用法、さらには説明をする独立的な用法もあることがわかる。

最後に、「状」に直接名詞が後接する場合と、「の」を介して後接する場合とを比較する。表 4 は、「状」に後接する名詞を高頻度順にまとめたものである。「血管・腫」や「結腸」は表 1 の頻度の高い前接語に対応するものだが、それ以外にも「陰影」「突起」「変化」「拡張」といった形や変化を表す一般語も後接語に使われているのがわかる。

表 4 接尾辞「状」に後接する名詞（頻度 19 以上、N=1,042）

順位	語彙素	頻度	割合	例
1	血管	83	8.0%	海綿状血管腫 25、莓状血管腫 16
2	結腸	78	7.5%	S 状結腸 78
3	陰影	58	5.6%	ガラス状陰影 12、腫瘤状陰影 8
4	硬化	35	3.4%	粥状硬化 31
5	突起	33	3.2%	鞘状突起 21、針状突起 6
5	核	33	3.2%	尾状核 29
7	動脈	24	2.3%	動脈硬化 22
8	変化	20	1.9%	変化が～4
9	拡張	19	1.8%	拡張を～5

「状」に「の」が後接する場合は 303 例（表 3）だが、「の」に接続する名詞の異なり語数は 182 語と多く、多様な語が接続することがわかった。頻度の高い語は順に「高」12、「物」10、「腫瘤」9、「隆起」「形態」各 7、「内容」「低」各 5 であった。この内の「高」は、「高信号」9 という形式で用いられる（例 十字状の高信号）。「の」を介した「状の」には後接する名詞に疾患名を示す名詞はなく、すべて形のある物や変化であった。

4.3 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の書籍サンプルとの比較

一般的な書き言葉における「状」と医学書テキストにおける「状」との比較をするために、BCCWJ の書籍サンプルに付与された日本十進分類法（NDC）の分類記号の情報を用いて比較することにした。NDC を用いたのは、「状」の使用は医学という書籍のテーマの影響が大

きいのではないかと考えたためである。

まず、BCCWJの「出版・書籍」および「図書館・書籍」のデータから、医学書テキストでの検索と同様に語彙素が「状」かつ品詞が「接尾辞-名詞的-一般」の用例を抽出し⁴、前接する1語が補助記号の例および「状」が「書状」を表す例、誤解析を除外した。分析対象の語は、延べ2,648語、異なり735語となった。これ以降、本稿では「出版・書籍」と「図書館・書籍」の2つのレジスターを合わせて「書籍」と呼ぶ。

次に、書籍データと医学書テキストのデータを比較するために調整頻度を求めた。書籍データは「短単位語数 Excel データ (Version 1.1)」に掲載されているサンプルごとの語数を NDC 分類記号 (第一次区分) 別に合計した⁵。BCCWJ の書籍サンプルにおける NDC 情報は増補されている (加藤他 2021) ため、増補後の情報を用いた⁶。表 5 は調整頻度を求める際に用いた医学書テキストおよび NDC 分類記号別の語数である。なお「中納言」では、NDC 分類記号の第一次区分を「ジャンル」と呼んでいることから、本稿でも「ジャンル」と呼ぶ場合がある。

図 1 は、「状」の 100 万語あたりの語数を、医学書テキストおよび書籍のジャンル別に示したものである。

表 5 医学書テキストおよび NDC 分類記号 (第一次区分) 別の語数

医学書	0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 技術工学	6 産業	7 芸術美術	8 言語	9 文学
5,358,397	1,682,302	3,500,118	6,712,080	15,380,038	5,268,094	4,708,999	2,565,422	4,627,744	1,185,236	22,555,019

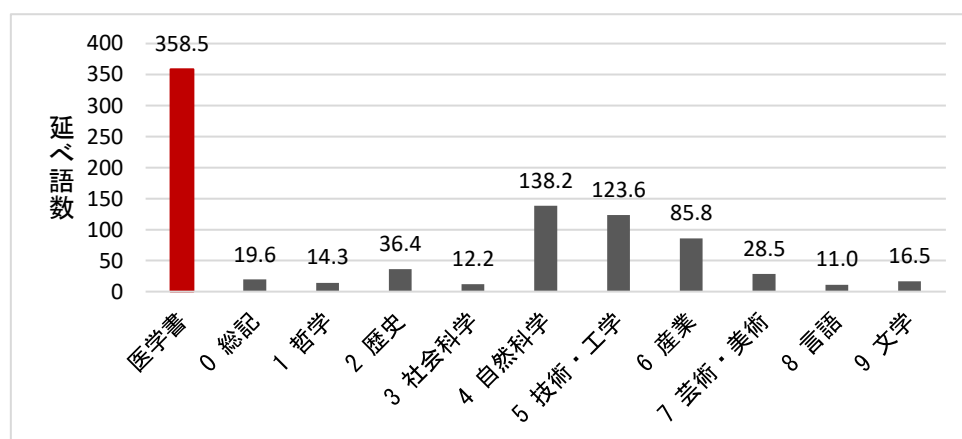


図 1 ジャンル別「状」の語数 (100 万語あたり)

⁴ 抽出には、検索アプリケーション「中納言」を用いた。

⁵ 「短単位語数 Excel データ (Version 1.1)」に掲載されているサンプルごとの語数は、記号等を除外した値と、除外されていない値が示されているが、本節の分析で調整頻度を求める際には、記号等が除外されていない値を用いた。これは、「S 状結腸」のように、「状」の前接語の上位に記号が用いられる場合があることによる。医学書テキストの調整頻度を求める際も同様である。

⁶ 書籍サンプルにおける NDC 番号の増補データは加藤祥他「BCCWJ-NDC」にて取得した。
(<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-NDC/>)

図1の延べ語数は、医学書が358.5語と最も多い。BCCWJのジャンルで最も多いのは「自然科学」で138.2語、次いで「技術・工学」の123.6語であるが、医学書テキストは「自然科学」の2.5倍、「技術・工学」の2.9倍と、目立って頻度が高い。また、「自然科学」について、NDC分類番号の第二次区分を見たところ、割合が高い順に、「医学」56.0%、「動物学」12.5%、「地球科学・地学」8.8%であり、医学が「自然科学」の半数以上を占めていた。これらのことから、たとえる表現の「状」は医学において多用される語であることが示唆される。

表6は各ジャンルの頻度順で上位に見られた語である。頻度の低い語はたまたま使用された可能性もあるが、参考までに掲載する。なお、表6では示されていないが、すべてのジャンルに見られた語は「放射」と「帯」の2語であった。

表6 ジャンル別 「状」の前接語の上位語（括弧内：100万語あたり語数）

ジャンル	前接語（語彙素）
0 総記	缶 (1.78) /放射、帯、階段、テープ (1.19)
1 哲学	分子 (1.43) /渦巻き (1.14) /放射、スポンジ (0.86)
2 歴史	袋 (2.98) /板 (2.68) /放射、階段 (1.19)
3 社会科学	粉 (0.85) /箸 (0.46) /板、帯 (0.39)
4 自然科学	放射 (7.40) /帯、S (3.42) /円筒 (3.23)
5 技術・工学	放射 (4.88) /クリーム (3.82) /ペースト (3.61)
6 産業	顆粒 (3.90) /ペレット (3.12) /房 (2.73)
7 芸術・美術	粒 (1.73) /放射 (1.51) /板 (1.30)
8 言語	粒 (1.69) /放射 (0.84) /帯、喇叭、短冊、液体、ツリー (0.84)
9 文学	放射 (0.93) /螺旋 (0.62) /筒、ドーナツ、円盤 (0.40)

4.4 医学書テキストの「名詞-普通名詞-一般」における「状」

ここまで、形態素解析の結果を用いて品詞が接尾辞の「状」を見てきた。形態素解析の結果を見ると、品詞が「名詞-普通名詞-一般」の語の中にも「輪状」「斑状」のように、「状」を含む表現が見られる。これらの語は本調査における接尾辞「状」の用例ではないが、医学書テキストにおけるたとえる表現「状」の特徴を見るために確認しておきたい⁷。

調査方法は、医学書テキストから品詞が「名詞-普通名詞-一般」かつ語彙素の語末に「状」が用いられる語を抽出した。目視で「状」がたとえる表現ではないと思われる語⁸、前後の語が未知語のもの、誤解析を除外した⁹。分析対象の語は延べ4,563語、異なり62語であった。表7は頻度が上位の語である。

⁷ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第1.1版の5章「形態論情報」には、「接尾辞-名詞的-一般」の「状」について、以下の注記が記載されている。説明中の「=」は「当該規定で注目している箇所」である。

注記：「[～の形・有り様]の意。漢語の1最小単位と結合したものは除く。(液=状)」

⁸ 「状」がたとえる表現ではないとみなし、分析対象から除外した語は次の7語である。「異状、形状、現状、症状、性状、病状、令状」

⁹ 誤解析とみなした語は「頭状」5語で「八つ頭状」が「八/つ/頭状」と解析されていた。

表7 「名詞-普通名詞-一般」のたとえる表現「状」を含む語（高頻度順、N=4,563）

順位	語彙素	頻度	割合	順位	語彙素	頻度	割合
1	甲状	2,802	61.4%	7	線状	88	1.9%
2	帯状	206	4.5%	8	環状	77	1.7%
3	輪状	153	3.4%	8	球状	77	1.7%
4	点状	119	2.6%	10	粒状	74	1.6%
5	斑状	96	2.1%	11	糸状	71	1.6%
6	網状	92	2.0%				

頻度の最も高い語は「甲状」で、全体の6割を占めている。「甲状」の後接語を見ると、「甲状」の97.6% (2,735語) は、「甲状線」「甲状腺癌」「甲状腺腫」のいずれかであり、「甲状腺」を含む語であった。「甲状」の「甲」は「兜（かぶと）」を表す（『日本国語大辞典』）が、現在では「兜（かぶと）」という意識は薄れ「甲状腺」という形式で一語化していると思われる。「甲状」を除いた2位以下の語を合計すると延べ1,761語であり、接尾辞「状」の延べ1,921語と比べて、少なくないことがわかる。表5の2~7位の「帯状」「輪状」「点状」「斑状」「網状」「線状」は、表1で1位の「S状」よりも頻度が高かった。

表7の各語彙素の左側の漢字を見ると、「帯」「輪」「点」「斑」「網」「粒」など、形に特徴のあるものが目立つ。これは表1で示された接尾辞「状」の前接語の特徴とも重なる。

5. 接尾辞「様」との比較

「様」は辞書で「名詞の下に付いて複合語をつくる。㊦ある物に類似していることを表す。…ふう。…のよう。」（『デジタル大辞泉』）と説明されるように、接尾辞「状」と類似した表現である。両者の相違を見るために、医学書のテキストから「状」と同様の手順で「様」の前接語と後接語のデータを抽出した。「皆様」の「様」のような「様」が敬称を表す例は目視で除外した。分析対象の語は1,340語となった。

5. 1 「状」と「様」の前接語の比較

「様」の前接語は延べ1,340語、異なり394語であった。表8と表9は前接語の内訳である。「状」よりも「様」のほうが延べ語数が少なく、異なり語数が多いことから、「状」よりも「様」のほうが多様な表現を形成していることがわかる。「状」および「様」の前接語の重なりを見ると、「状」のみ、あるいは「様」のみに見られる前接語は、延べで「状」が74.6%、「様」が78.7%と8割弱、異なりで「状」が79.8%、「様」が81.2%と約8割である。このことから、医学書テキストにおける「状」と「様」の前接語は一部重なりがあるものの、使い分けられていることがわかる。

表8 「状」の前接語の内訳

前接語	延べ		異なり	
	語数	割合	語数	割合
「状」のみ	1,433	74.6%	292	79.8%
「様」と重なる	488	25.4%	74	20.2%
計	1,921	100.0%	366	100.0%

表9 「様」の前接語の内訳

前接語	延べ		異なり	
	語数	割合	語数	割合
「様」のみ	1,055	78.7%	320	81.2%
「状」と重なる	285	21.3%	74	18.8%
計	1,340	100.0%	394	100.0%

以下、「状」のみあるいは「様」のみに見られた前接語、「状」と「様」のいずれにも見られた前接語を見ていく。

まず、表 10 と表 11 は「状」のみ、あるいは「様」のみに見られた前接語のうち、頻度 15 以上のものを挙げた。表 11 の「様」のみに見られた前接語の特徴としては、「感冒」や「インフルエンザ」「～病」などの具体的な疾患名が見られることが挙げられる。「様」の前接語で最も頻度の高い「症」の内訳を見ると、頻度が高い順に「心筋症」15 例、「失調症」9 例、「狭心症」8 例、「認知症」8 例と、疾患名が用いられていた。一方、表 10 の「状」の前接語に疾患名は見られない。また、表 11 の「様」の前接語「満月」はすべて「満月様顔貌」であり、「イヌボエ（書字形：犬吠）」は 15 例のうち、14 例が「犬吠様（の）咳、犬吠様咳嗽」であった。「犬吠」のように、視覚的に特徴がとらえられない語が用いられるのも「様」の特徴と言える。(6)～(8)は「感冒様」「心筋症様」「犬吠様」の例である。

- (6) ウイルス性心筋炎では発症の 1～2 週間前に感冒様症状がみられることが多い。(診断_循環器疾患)
- (7) C型肝炎ウイルスにより肥大型心筋症様病態をきたす可能性が示唆されている。(内科_循環器疾患)
- (8) 小児に起こる吸気時喘鳴，息切れ，嘔声を伴った犬吠様のせきが特徴である。(内科_呼吸器疾患)

表 10 「状」のみに見られた前接語

(頻度 15 以上、N=1,433)

順位	語彙素	頻度	順位	語彙素	頻度
1	粥	64	15	鞘	21
2	顆粒	55	16	撥	20
3	海綿	50	16	紡錘	20
4	索	48	16	浮腫	20
5	尾	42	16	地図	20
6	乳頭	35	20	樹枝	19
7	線	34	20	ニュウトウ	19
8	泡沫	32	22	放射	17
9	巢	30	22	雲	17
10	囊	27	24	半球	15
11	鎌	24	24	鋸齒	15
12	円板	23	24	兔糞	15
13	リング	22	24	蜘蛛	15
13	板	22			

表 11 「様」のみに見られた前接語

(頻度 15 以上、N=1,055)

順位	語彙素	頻度
1	症	73
2	感冒	46
3	腺腫	40
4	インフルエンザ	37
5	病	30
6	アナフィラキシー	23
7	喘息	22
8	インシュリン	19
9	満月	16
10	イヌボエ	15

「状」と「様」の前接語を比べると、「状」は形を表す語が目立ち、質的な特徴を表す語も見られる。他方、「様」は、疾患名をはじめ、対象を全体的にとらえる語が目立つ。「様」の前接語に疾患名が見られる用法について、三枝・本多(2021)では、医師が患者の疾患を推定する際に用いられる、医学に特徴的な用法であることが述べられている。本調査も、そ

の指摘と重なる結果だと思われる。

次に、表 12 は、「状」と「様」の両者に重なって見られた前接語 74 語のうち、「状」と「様」の頻度の合計が 10 以上の 21 語である。全体的に「嚢胞」「結節」「腫瘤」「腫瘍」「瘤」「腫」「ポリープ」「嚢腫」「水腫」「疣」「憩室」など、部位が変化した形を表す語や、病変に関する語がみられる。また、「ソーセージ」「風船」も含め、膨らみのある形をしたものを表す語が目立つ。

頻度を見ると、21 語のうち、「状」「様」いずれかの頻度が 1 の前接語が 10 語と約半数を占める。このことは、「状」と「様」の両者に用いられる語も「状」か「様」で使い分けられる傾向が見られる。

表 12 「状」と「様」の両者に見られた前接語

(「状」と「様」の合計頻度降順)

順位	語彙素	状	様	計
1	S	85	2	87
2	嚢胞	55	8	63
3	ガラス	14	37	51
3	結節	48	3	51
5	炎	1	37	38
6	腫瘤	18	9	27
7	腫瘍	4	21	25
8	編目	21	1	22
9	ポリープ	18	3	21
9	腫	6	15	21
11	瘤	12	8	20
12	苺	18	1	19
13	ゼリー	17	1	18
14	ソーセージ	1	16	17
14	嚢腫	14	3	17
16	水腫	3	11	14
16	疣	13	1	14
18	房	11	1	12
19	憩室	1	10	11
19	字	10	1	11
21	風船	1	9	10

表 12 で「状」と「様」の頻度がいずれも 5 以上の語は「嚢胞」「ガラス」「腫瘤」「瘤」「腫」の 5 語であった。この 5 語について、さらに前後の語を見てみると、「ガラス」では、「すりガラス状陰影」12 例、「すりガラス様陰影」24 例のように、同じ語で「状」と「様」が使われている例も見られたが、多くは (9) の「嚢胞状に～」や (10) の「嚢胞様構造」のように異なる語に用いられていた。

(9) III型(congenital choledochocoele)は十二指腸壁内の胆管が嚢胞状に拡張し十二指腸内腔へ突出したものである。(内科_肝・胆・膵疾患)

(10) 気体あるいは液体内容をもつ肺内の嚢胞あるいは嚢胞様構造を指し、結核・腫瘍・寄生虫・真菌などによる原因の明らかな空洞を除くもの(イヤート_呼吸器疾患)

なお、表 12 の語を表 10 の「状」のみで見られる語と比べると、表 12 には部位が変化した形を表す語や、病変に関する語が目立つ。これは、「状」の持つ形をとるという特徴と、「様」の持つ具体的な疾患名を推定する際に用いられるという特徴の間に位置するものではないかと思われるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

5. 2 「状」と「様」の後接語の比較

表 13 は、「様」の後接語を高頻度順にまとめたものである。延べ語数は 1,340 語、異なり語数は 186 語である。先の「状」の後接語を示した表 3 と比較すると、助詞「の」の頻度が最も高い点は共通している。ただし、「様」の後接語のほうが割合は高い。また「状」では 10.3% と高頻度であった「に」が「様」では 3.4% と低く、補助記号は 12 位までには現れず、動詞を修飾する用法や並列用法等が少ないことが見てとれる。すなわち、「様」は名詞が後接する割合が「状」より高いと言える。さらに、「様の」に後接する名詞は「症状」が 42 例と最も多く、「様」の後接名詞は、「の」を介する場合介さない場合を合わせて「症状」が 226 例と最も多い。一方、「状」と「症状」の組み合わせは一例もない。このことから「様」は「症状」という広範な意味を持つ語を修飾しうる全体的なありさまを示す語であり、「状」はあくまで具体的な形を形容するために使われる語と考えられる。

表 13 接尾辞「様」の後接語（頻度 22 以上、 $N=1,340$ ）

順位	語彙素	頻度	割合
1	の	283	21.1%
2	症状	184	13.7%
3	顔貌	48	3.6%
4	に	45	3.4%
5	皮疹	37	2.8%
6	陰影	31	2.3%
7	変化	29	2.2%
8	物質	27	2.0%
9	病変	26	1.9%
10	発疹	24	1.8%
11	作用	23	1.7%
12	所見	22	1.6%

6. まとめ

本研究では医学書テキストにおける「たとえる表現」の一端を明らかにする目的で接尾辞「状」に注目し、用法を分析した。その結果を以下の 5 点にまとめる。

1. 「状」の前接語には「S、線」など形そのものを表すもの、「粥、海綿」など質的な様子も表す語、「嚢胞、結節」などの部位が変化した形を表す語が多い。
2. 「状」の後接語で最も頻度が高いのは名詞であったが、助詞の「の」を介した名詞接続も少なくない。また、「に、と、を」を介した動詞修飾用法や読点や接続詞を用いた並列用法も見られる。
3. 「状」の後接語には「血管、結腸」などの体の部位のほか、「印影」「突起」「変化」「拡張」といった形や変化を表す一般語が使われている。
4. 書籍の NDC 分類記号を用いて分析した結果、「状」は医学において多用される語であ

ることが示唆された。

5. 同じ「たとえる表現」の接尾辞「様（ヨウ）」と比較した結果、「状」は形を表す語が多く用いられる傾向があるのに対し、「様」の前接語には疾患名、後接語には「症状」のような全体の状態やありさまを表す語が多く見られ、用法の違いが観察された。

医学書テキストに用いられるたとえる表現には、「状」「様」のほかにも、「一感」（イライラ感）、「一形」（三日月形）、「一大」（小豆大）などが見られる。今後は、これらの表現の分析も行い、医学書テキストにおけるたとえる表現の実態を明らかにしていきたい。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP18H00679 の助成を受けたものです。

文 献

- 内山清子・岡照晃・東条佳奈・小野正子・山崎誠・相良かおる(2018)「実践医療用語の語構成要素抽出の試み」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3、pp.463-467.
doi/10.15084/00001680
- 加藤 祥・森山 奈々美・浅原 正幸 (2021)「現代日本語書き言葉均衡コーパス」書籍サンプルの NDC 情報増補：NDC 情報を用いた随筆の抽出と文体調査」『国立国語研究所論集』(21) pp.65-84.doi/10.15084/00003437
- 国立国語研究所 (2015)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き第 1.1 版」
<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/doc.html>
- 三枝令子・本多由美子 (2021)「医学書テキストのたとえる表現—「よな」、接尾辞「様（ヨウ）」の特徴」『言語資源ワークショップ発表論文集』(6) pp.178-189.国立国語研究所.
doi/10.15084/00003491
- 三枝令子・丸山岳彦・松下達彦・品川なぎさ・稲田朋晃・山本一晃・石川和信・小林元・遠藤織枝・庵功雄 (2020)『医学用語の収集と分類』「日本語教育」176、pp.34-47.
- 東条佳奈・麻子軒・相良かおる・高崎智子・山崎誠 (2020)「病名における「-性」の分析：一般書籍との比較から」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』5、pp.357-364.
doi/10.15084/00003175
- 野村雅昭 (1978)「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究 9』pp.102-138.
doi/10.15084/00001057

調査資料

- 伊藤正男・井村裕夫・高久史磨 総編集 (2010)『医学書院医学大辞典 第2版』
- 岡庭豊・荒瀬康司・三角和雄 (2019)『イヤート 2020 内科・外科編』メディック・メディア
- 金澤一郎、永井良三 総編集 (2015)『今日の診断指針 第7版』医学書院
- 高久史磨・尾形悦郎・黒川清・矢崎義雄 監修 (2010)『新臨床内科学 第9版』医学書院
- 福井次矢・高木誠・小室一成 総編集 (2018)『今日の治療指針 2018年版』医学書院
- 水口雅・市橋光・崎山弘 総編集 (2015)『今日の小児治療指針 第16版』医学書院
- 『デジタル大辞泉』小学館、「ジャパンナレッジ」利用 (2022年5月31日閲覧)
- 『日本国語大辞典』小学館、「ジャパンナレッジ」利用 (2022年5月31日閲覧)

関連 URL

加藤祥・森山奈々美・浅原正幸「BCCWJ-NDC」<https://github.com/masayu-a/BCCWJ-NDC> (2022年6月17日閲覧)

国立国語研究所 「「中納言」版 BCCWJ/短単位語数」<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/bcc-chu-suw.html>